

まえがき

西 成彦

《カリブ海島嶼地域（キューバからトリニダードまで）およびカリブ海に面する南北アメリカ大陸沿岸地域（米国・メキシコ・ベリーズ・グアテマラ・ホンジュラス・ニカラグア・コスタリカ・パナマ・コロンビア・ベネズエラ）は、植民地化と奴隷貿易に始まる〈近代〉の過程で、言語（英語・スペイン語・フランス語・オランダ語および各国語系クレオール諸語）をはじめとして、総体としての文化－民族的な混淆と多様性を最大の特徴としている。文学から大衆文化まで、この地域のさまざまな表現・消費活動を手がかりとして、相互に影響を与え合いながら展開してきたグローバルな歴史性を踏まえ、脱〈周縁〉化をめざす研究を展開する。》

——以上が、2011年度に「環カリブ地域の言語圏横断的文学及び文化の研究」という研究課題を掲げて、「環カリブ文化研究会」を立ち上げた際の趣意文である。その背景には、2000年に『クレオール礼賛』の著者のひとりであるジャン・ベルナベさん、2001年に作家マリーズ・コンデさんをお招きしたという国際言語文化研究所のかつての活動が前史としてある（ベルナベさんの講演「ネグリチュードからクレオール性へ：エメ・セゼールをめぐって」については『言語文化研究』12巻3号、マリーズ・コンデさんの講演「言語の色——カリブ文学を代表する作家がランボーを読む」については、同14巻2号でご覧いただける）。

また、本研究会が立ち上ってから後にも、ベルナベさんと同じく『クレオール礼賛』の著者のひとりであり、小説家としても、コンデ同様にじつに着実、かつ多産でいらっしやるパトリック・シャモワゾーさんをお迎えした2012年11月15日のイベントのことは、まだ記憶に新しい。

そうしたなかで、2010年11月に実施された「秋季連続講座：グローバルヒストリーズ——国民国家から新たな共同性へ」の「第1シリーズ：トランスアトランティック／トランスパシフィック」の「第4回：カリブは周縁か」において、フランス語圏・スペイン語圏・英語圏を横断する「カリブ研究」の可能性を、まず輪郭として示したことが、本研究会を立ち上げるにあたっての最初のきっかけになった。今回の特集は、同講座の記録として残された『言語文化研究』23巻2号に次ぐものであり、この5年間の成果として、ひとまず五名から寄稿を得た。「研究所重点プロジェクト」としての5年間のサイクルを締めくくるにあたって、近々、さらに特集を組めたらと思っている。

